

発行：2013年10月 発行責任者：松崎 道幸

追悼 安田慶秀先生

当会結成時から共同代表を務めてこられた、安田 慶秀先生(やすだ・けいしゅう=北海道大名誉教授・心臓血管外科学)が、2013年7月9日午前11時5分、ぼうこうがんのためご自宅で死去されました。享年72歳。1941年、沖縄県読谷村出身。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(当会第2回講演と交流のついで講演される安田先生=2012年8月30日)



安田慶秀先生の死を悼む

共同代表 黒川 一郎

医療九条の会・北海道共同代表として
安田慶秀先生の死を心からお悼みもうしあげます。

追懐するに、先生は昭和二けた生まれ、私は昭和五年、大学人として数十年互いに知ることなく、過ごしたわけです。

お知り合いになった時期、それは私が札幌医大の当時の中央検査部教授として、北大の第二外科教授田辺達三先生と中学・北大予科時代を経て互いに教授職にある人間としておつきあいがあったところに遡ります。田辺先生を通じて安田慶秀先生のお名前を知ったことでした。安田先生は田辺君の片腕としてすでに同教室の循環器外科の指導的

第22号 目次

■追悼 安田慶秀先生	
黒川 一郎	1
猫塚 義夫	3
松崎 道幸	5
■小森陽一さん「憲法を考える連続講演会」	
.....	8
■小出裕章さん講演会「私たちの未来と原発」	
.....	11
■「オリバー・ストーンが語る もうひとつのアメリカ史」から	
黒川一郎 越田靖夫	14
■アピール「安倍内閣の憲法改悪、集団的自衛権行使・特定秘密保護法制定に断固反対し、医療九条の会・北海道の出発時の信念をきっぱり守り抜こう」	20
■ご案内	23

地位にあり、私の在職中、北大循環器外科の最初の教授として名声大いに高いものがありました。

私の退職数年前でしょうか、私が北海道血液学会地方会の会長として、安田先生に特別講演をお願いしました。恐るべし、講義の内容はとて私には手の届かぬ最新レベルの高度な講義で同外科の水準の高さを示すものでありました。

安田先生の第一印象はこのように、アカデミックレベルの高さで、これ以外の先生のもの考え方、生きてきた歴史などは知るよしもありませんでした。

それから十年後、安田先生はN T T札幌病院に勤務されておられた頃です。私は、当時請われて北海道社会保障推進協議会会長として北海道の社会保障の拡充、そして当時ですから、箕輪登先生の自衛隊

のイラク派遣差し止め訴訟を機に、憲法9条を守る会の擁立に猫塚医師等とともに心を砕いておりました。手探り同然で、同士を得たい気持ちからでありました（黒沢明の映画；七人の侍のエピソードにも似ていました）。ある人から安田先生を推挽され、背景もわからぬまま突然猫塚先生とN T T病院にお邪魔し、会の内容、これからの方針を「カクカクシカジカ」とおそろおそろ申し上げると、彼はにこやかに参加を快諾してくださり天にもものぼる心持ちでした。

あとで聞きますと、彼はものごころついた昭和20年沖縄戦の時、米軍猛攻のもと、まだ小学校入学前の年齢だったそうです。沖縄で壮絶な経験をされたことを系統的に知ることになったのは、2012年8月30日の先生の個人史を語られた、「あした島 うちなー」の題名の講演会でありました。

あときの注意深く、詳細に用意された精密な講演内容を聞くまで、本当の安田先生の人生経験・沖縄の真実を知ることが如何にすくなかったかを思い知らされたのでありました。

その後先生は闘病生活にありながら、数回、方波見、猫塚両先生、私の顔ぶれでお話をする機会を作っていただきました。そして突然の訃報。言葉を失いました。やるべき仕事、発したい言葉をどれだけたくさん抱いて先生は旅立たれたことでしょうか。告別式の時、前述した田辺達三先生から、生前の彼の生きざまを聞いたとき、まったくの北大時代、それ以後の時期を安田先生はそれぞれの時期、立場を十分にわきまえてベストをつくしてこられたかを知りました。不躰でしたが、先生の棺の中に、一冊ヘーゲルに関する絵本を拝見し、常に自己発展に努力された先生を拝察した気持ちがしたのでありました。

安田先生。私は終生自己省察・自己発展をこころがけてこられた先生を忘れません。

安田先生安らかに休息ください。

(札幌医大名誉教授)



当会第4回総会で発言する安田先生＝
2010年2月13日

安田慶秀先生のご逝去にあたって

共同代表 猫塚 義夫

安田慶秀先生のご逝去にあたり心から哀悼の気持ちを捧げます。

これまで先生からいただいた数々の御教示をこれから如何にわが身のものにするかという命題を授かった気がしてなりません。

慶秀先生、あえて、このように書くの北海道大学循環器外科教授としての職責はもとより、いち医学徒として、また人生の先達として先生を思う気持ちからなのです。

最初に慶秀先生のお名前をお聞きしたのは、すでに25年以上も前のことです。当時、一緒に仕事をしてきた、沖縄県出身の伊志嶺博先生から慶秀先生は『沖縄の星』として紹介くれたときでした。当時はすでに循環器外科の新鋭教授として多くの実績を積み、これからを嘱望されていた時期でした。

20年ほど前の出来事です。私は、胸椎後縦靭帯骨化症の患者さんに胸椎前方固定術施行していました。ところが術後管理の体位交換中に胸椎椎体骨折をきたし、胸部大動脈から分岐している分節動脈の断裂と思われる個所からの出血が止まりませんでした。

1カ月間の北九州市への出張から帰院した私は、胸部血管外科の細川誉志雄先生とともに安田慶秀教授の部屋を訪れました。

結果は、人工血管置換術の適応でしたが、大学病院では手術枠を確保するのが困難、しかし手術を待機することはできないというのが現状でした。そこで、安田教授は勤医協中央病院へ出向いて手術することを決意してくれました。他病院での手術は、さまざまな困難があることは私たちも十分承知していますので、安田先生の決断に胸が熱くなりました。

ただちに、日曜日の朝来院され、麻酔科の協力のもと細川先生が助手に入り、8時間にわたる胸腹部大動脈人工血管置換術を施行されました。その患者さんは一命を取り留めその後無事にリハビリをやり遂げることができました。

こうした中で慶秀先生の穏やかな中にも人命に対する譲ることのない責任感を見ることができました。

自民党を中心とする改憲勢力により、靖国神社問題とともに「集団的自衛権」容認や憲法9条改定が国内政治の焦点になってきました。私たちは、2003年、全国「九条の会」からの呼び掛けにこたえて、医師で評論家の加藤周一先生を招き、「医療九条の会・北海道」を設立し、その後の憲法擁護・発展運動の基盤を作りました。その後、沖縄問題、アフガン・イラク戦争反対と中東問題、憲法25条・社会保障問題や反原発・反核運動へと課題を広げ今日に至ることができました。

その過程で、「会」の組織強化を目的として、黒川一郎先生とともに当時 NTT 東日本病院に勤務されていた慶秀先生に「共同代表」への就任のお願いに伺うことになりました。以前、人工血管置換術をしていただいて以降、十分なお礼もできずに日常診療に埋没していた私にとっては、決して低いハードルではありませんでした。

しかし、いとも容易に「共同代表」を受けてくれたのです。この時点では、私の慶秀先生への認識は全く不十分なものでした。「沖縄の星」と言われた先生がどうして憲法擁護運動へ身を投じようとする

のか・・・しばらくの間、ことあるごとに考えさせられました。

それには、後ほど徐々に解明されてくる慶秀先生の生い立ち、恩師とのかかわり、北海道大学医学部時代のサークル活動などが、重層的にかかわっていることを知らされることになりました。

2009年、アフガニスタンで難民支援で活躍している中村哲先生を招き講演会の準備をしているときでした。安田先生のお供をして、中村先生とは県立福岡高校・九州大学医学部の同級生で友人の藤堂省北海道大学第一外科教授を訪ねてゆきました。もちろん、目的は「会」への賛同と中村講演会への呼びかけ人への要請でした。

お二人のお話を横で拝聴していると、内容は広く深く、臓器移植問題から医学部の在り方、さらには社会問題への発展してゆくのでした。

ここでも、慶秀先生は、誰にでも分け隔てなく問題を共有する懐の深さをもっている先生であることを感じさせるのでした。どうして、そうなのか・・・私の中では、ますます興味の尽きない先生となってゆくのがわかりました。

その後、美唄中央労災病院院長へ就任され、病院再建・経営問題で大きな力を割いていた時期にも、現地空知地方で「九条の会」にかかわりを持ち、周囲の人々を励まし続けました。その中で、奈井江町で地域医療に活躍され、北海道新聞にも連載を続けている方波見康雄先生の講演会を主催されました。私も黒川先生と能條多恵子さん（当会共同代表）を車に乗せ美唄へと走りました。

さて、慶秀先生のもとで、『会』の活動を続けていた中で、先生から膀胱がんの発生と手術治療実施の連絡が入りました。ただちに、黒川先生のお伴として病室へお邪魔いたしました。その時は大変闊達で、病院医療やがん治療の在り方についてゆっくりお話ししてくれました。その時、先生の大学時代の同期であった教授がお見舞いに来られた時は、全くの「学生言葉」で会話が進んでいくのを垣間見て、これもまた慶秀先生の素顔の一面であるのだと感じました。

一方、「会」ではこうした慶秀先生の半生を聞くことをお願いし、講演会開催を主催いたしました。そこでは、沖縄・読谷村にける幼少時代の生活から始まり、藁ぶきの校舎で学んだ小学校時代、太平洋戦争末期の沖縄戦の実態とその後、戦後アメリカによる沖縄占領の実態と不当性、さらには日米安保体制への批判へと語られました。慶秀先生の人生観に強く根ざしている沖縄への思いが高校時代までに形成されてきたものと思われました。そして、慶秀先生が語る『沖縄問題』は、いつも生活実態に根ざした沖縄の人々の心が流れていました。数年前、私は学会で沖縄へ行く機会がありました。その時半日、沖縄県立図書館を訪れ、沖縄・読谷村の歴史と慶秀先生の指摘の持つ重みをつくづく考えさせられました。

2012年3月、能條さんとともに「会」の総会結果の報告を目的に闘病中のご自宅へ伺いました。道に迷った私たちを道路にでて迎えてくれた慶秀先生の笑顔が今も私の脳裏に焼き付いています。

奥様とご一緒に沖縄に行かれた直後でしたが、元気に沖縄の様子とともに、「沖縄問題」へ取り組むべき姿勢を静かに、時にユーモアを交えて語ってくれました。

それは、外からの沖縄ではなく、歴史的に差別されてきた沖縄を、その中からとらえる大切さを教えてくれました。これからも常に立ち返るべき原則的視点として堅持してゆきたいと思います。

また、私たちが立ち上げた「北海道パレスチナ医療奉仕団」への忠告と励ましが多くの勇気をくれたことも忘れられません。団員一同心から感謝いたします。

さて、慶秀先生が逝去された今、私たちに残されたことを考えます。

特に、副幹事長・堀元進先生とともに、沖縄問題を「会」の重要課題のひとつとして掲げ取り組みを
持続・強化することです。それは、歴史的に差別を強いられてきた「沖縄」が、平和な日本を創る過程
で決して避けて通ることのできない通過点・一里塚としてとらえ続けることだと考えます。

「医療九条の会・北海道」を通して、安田慶秀先生と交流しご指導をいただくことができたことは、私
と「会」にとって大変な力を与えてくれました。ここにあらためて心からお礼申し上げます。

これからも先生から御教授いただいた平和を思う多くの視点と心を堅持して、「会」の発展と平和な
日本を創る努力を誓い追悼の言葉といたします。

長い間、おつかれさま、そして、ありがとうございました。

やすらかにお休みください。

(2013年10月21日 所用にて滞在中の米国・ロサンゼルスにて)
〔北海道パレスチナ医療奉仕団〕団長 勤医協札幌病院 整形外科

共同代表・安田慶秀先生を悼む

幹事長 松崎 道幸

去る7月9日、本会の設立時からの共同代表、安田慶秀先生が亡くなりました。

本会の活動推進にとって、かけがえのない方を失った悲しみは言うにつくせません。ここに深く哀悼
の意を表するものです。

以下に安田先生の御経歴を掲げます。

1941年 沖縄県読谷村渡慶次にて出生。

渡慶次小学校、読谷中学校、読谷高等学校を経て

1960年 北海道大学医学部入学。

1966年 同卒業。

1972年 学位（医学博士）授与。

1984年4月 北海道大学医学部第二外科講師

1986年7月 同医学部附属病院救急部助教授

1990年11月 同医学部附属病院循環器外科教授

1999年4月 同大学院医学研究科高次診断治療専攻循環病態学講座 循環器外科部門教授

2006年7月 医療九条の会・北海道設立（共同代表）。

2007年4月 独立行政法人労働者健康福祉機構北海道中央労災病院せき損センター院長

2012年3月 同退職

2013年7月9日 膀胱がんにて亡くなる。

日本胸部外科学会理事，学術調査委員会委員長

日本心臓血管外科学会 第33回（2003年）学術総会会長，理事

日本血管外科学会理事，学会誌編集委員

日本外科学会 評議員，Surgery Today Editorial Board

日本循環器学会 評議員

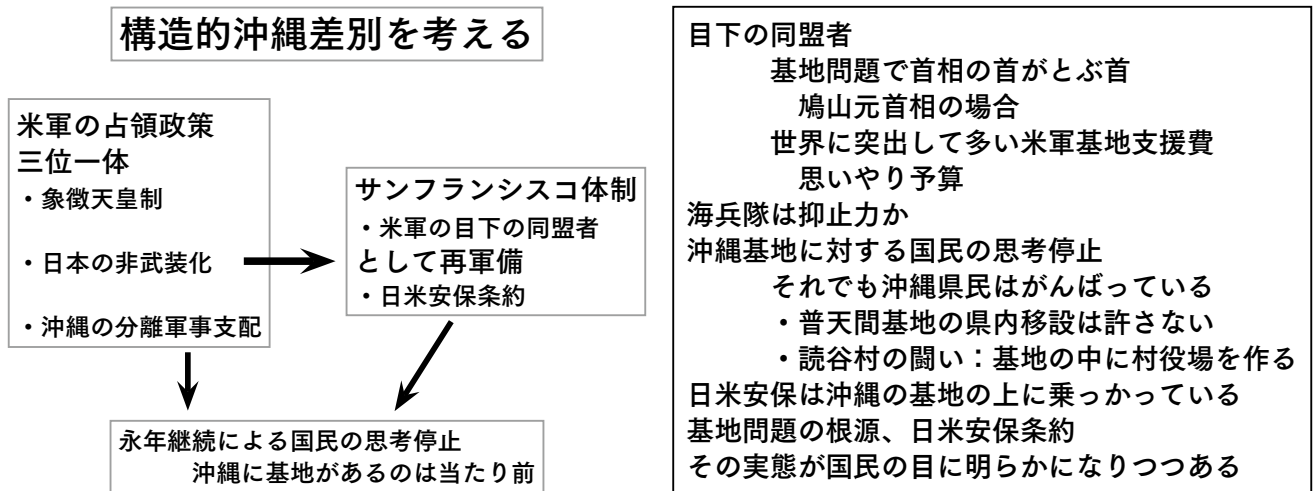
日本心臓病学会 F J C C

安田先生の御意志を表す文章があります。

一つは、2012年3月の「北海道中央労災病院せき損センター院長退任のあいさつ」です。

…最後になりますが、昨年の東日本大震災以降「未曾有の」とか「想定外」というような言葉があまりにも軽々しく使われるようになりました。政府の震災や原発事故に対する対応、オリンパス社の粉飾決算問題、A I Jの年金運用の不祥事に見られるあまりにもお粗末な危機管理能力。東京電力福島第一原子力発電所事故では十分な事故究明・検証がされないままに原子炉低温冷却停止「状態」が宣言されました。新聞では「東南海トラフ巨大地震」の危険性が大きく報道され、一方では原発再稼働に向けて電力会社、政府の動きも活発です。私は昭和16年に沖縄に生まれ、太平洋戦争で「鉄の暴風」が吹き荒れた島で生き残ることが出来、縁があってこの五年間労災病院で勤務させてもらいました。鉄血勤王隊の学徒兵、郷土防衛隊への徴兵、避難先の山中におけるお産、あるいは栄養失調などで私自身の身内も何人も亡くなっています。1952年、サンフランシスコ講和条約によりアメリカの日本占領が終わったあとも、沖縄はアメリカ軍の統治下に置かれ、軍事占領下につくられたアメリカの軍事基地は1972年に沖縄が日本に復帰したときもなくなりませんでした。憲法九条をもつ「平和国家日本」は幻想でしかなく期待は裏切られました。今、問題となっている普天間基地は住宅密集地のど真ん中にあり、2年前には隣接する大学に訓練中の大型ヘリコプターが墜落し大惨事になる一歩手前で世界一危険な基地といわれております。政府は普天間基地を辺野古へ移設しようとしています。これは「移設」ではなく新たな基地の建設であるといわれております。日本国土のわずか0.6%の面積しかない狭い沖縄に、すでに日本全国米軍基地の75%が存在し、さらに新たな基地をつくるとはどういうことでしょうか。是非お考えいただきたいと思います。…

もう一つは、2012年8月30日に当会主催で行われた「わした島うちなあー」と題した安田先生の御講演のパワーポイントファイルの最後の2枚です。



先生は、日米安保条約が沖縄と日本の苦しみの根源であることを喝破しておられました。北大の現職教授でありながら、医療九条の会・北海道設立に尽力されたのは、実に、この国の抱える矛盾の根本原因を発見され、その治療を実践する「上医」としての使命遂行と言う当然の行為であったのです。

私たちは、安田慶秀先生の御遺志をしっかりと受け継ぎ、日本国憲法第九条を守る運動を進めてゆく覚悟です。

(深川市立病院内科部長)



シンポジウム「安心してらせる医療・介護を」でシンポジストを務める安田先生=2009年12月6日

小森陽一さん（九条の会事務局長）が道内で連続講演会

草の根の力で改憲を阻止しよう



当会とエンレイソウ九条の会がコーディネートを行って、「小森陽一さんと憲法を考える連続講演会」を8月18日から27日まで道内10ヶ所で行い、のべ2300人の市民が参加しました。

「草の根からの力で、憲法改悪を阻止しよう」との小森さんの呼びかけが各地で大きな感動を呼びました。8月18日に八雲町で行った講演から、自民党改憲草案について述べた点を中心に紹介します。

アメリカの戦争を代理する国に

まず九条を見てください。自民党草案では、一番大事な現行憲法九条二項を全面的に削除します。現行憲法の「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」を全面削除し、「わが国の平和と独立並びに国及び国民の安全を確保するため、内閣総理大臣を最高指揮官とする国防軍を保持する」とあります。そして、三項を見てください。「国防軍は、第一項に規定する任務(平和・独立・安全のこと)を遂行するための活動のほか、法律の定めるところにより、国際社会の平和と安全を確保するために国際的に協調して行われる活動」をしております。日本が外国と結んでいる軍事同盟は日米安全保障条約だけです。「国際」と言ったら、これは日本とアメリカの関係のことです。その精神で読み替えてみると「国防軍は第1項に規定する任務を遂行するための活動のほ

か、法律の定めるところにより、アメリカ社会の平和と安全を確保するため、アメリカと協調して行われる活動をする」と、こうなるわけです。つまりアジアでアメリカが行いたい戦争の代理をする、アメリカのために日本人の血を流す軍事に自衛隊をしていくということ。

それだけではありません。国防軍が内閣総理大臣の指揮のもとに軍事行動を始めた日本の国はどうか、第5項です。「国防軍に属する軍人その他の公務員がその職務の実施に伴う罪又は国防軍の機密に関する罪を犯した場合の裁判を行うため、法律の定めるところにより、国防軍に審判所を置く」。軍人の下にすべての公務員がシフトされて、防衛上の罪を犯したときは全員が国防軍の審判所(裁判所)に送られる。石破茂自民党幹事長が4月末にBS放送のインタビューで言っていた「最高刑は死刑」ということも重大です。

さらに、ここで見逃していけないのは、「国民の安全」は国内だけではないのだということです。

第二十五条の三を見てください。「国は国外において緊急事態が生じたときは、在外国民の保護に努めなければならない」。「在外国民の保護」と称して、国防軍は海外にもいくらかでも出ていけることとなります。

国民を縛る憲法に

見逃してならないのは、ここで「緊急事態」という4文字熟語が使われていることです。第9章で「緊急事態」というのが出てきます。これは「3.11」を口実にして、緊急事態つまり戒厳令状態を敷ける憲法条項です。第九十八条を見てください。

「内閣総理大臣は、我が国に対する外部からの武力攻撃、内乱等による社会秩序の混乱、地震等による大規模な自然災害その他の法律で定める緊急事態において、特に必要があると認めるときは、法律の定めるところにより、閣議にかけて緊急事態の宣言を発することができる」。閣議だけで内閣総理大臣は「これは緊急事態だ」とすることができる。憲法上は武力攻撃、内乱、地震等大規模自然災害ここまでは明記されていますが、後は他の法律でいくらかでも、緊急事態だと内閣総理大臣ができるということです。

緊急事態宣言してしまったこの国はどうなるのか。自民党草案の九十九条です。第1項だけ見てみましょう。「緊急事態宣言が発せられた時、内閣は法令と同一の効力を有する政令を制定することができる」。民主的国家は、権力が一つのところに集まらないために三権分立するわけでしょう。立法権力、行政権力、司法権力は全部分けなくてはいけないわけです。先ほどの軍事裁判所であれば、軍の司令官が内閣総理大臣ですから、内閣総理大臣のもとに軍の審判所があることになり、ここで行政権と司法権が合体し、九十九条一項で行政権が立法権を持てる。閣議決定だけで法律と同じ効力を持つ政令を出せる。法律だけ作るのではなく、予算もちゃんとつけているのです。続きを見てください。「内閣総理大臣は財政上必要な支出その他の処分を行い、地方自治体の長に対して必要な指示をすることができる」。この瞬

間、八雲町長に内閣総理大臣から指示が来れば、町役場の人たちは軍事命令で動かなければならない、こういう体制です。

見事に、内閣総理大臣を中心にした独裁体制が、「せーの」でやれるようになっていきます。こういうことを規定した憲法は、私たち主権者たる国民が国家権力を縛る最高法規ではなくなってしまいます。

「第十章 最高法規」のところで、現行憲法では、憲法を守らなければならないのは、天皇・摂政・国会議員・公務員（九十九条）なのに、自民党草案では「すべて国民は憲法を尊重しなければならない」（百二条）となっていて、国家権力が国民に縛りをかけることになっています。私たちが権力に縛りをかける現行憲法の思想を100%抜いてしまう。だから、九十七条は全面削除する。「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去幾多の試練に堪え、現在および将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである」。この条文がばっさりと削除されています。

自民党の本音

基本的人権もとんでもないこととなります。「第3章 国民の権利及び義務」で国家に縛りをかけているのが現行憲法。十一条で「国民は全ての基本的人権の享有を妨げられない」としています。これは国家によって妨げられないということ。「国民は基本的人権を持つ個人である」という考えかたこそが、1789年の人権宣言以来、権力と闘ってきた民衆がかちとってきたものです。ところが自民党草案では、「すべて国民は人として尊重される」（十三条）。「人」って何ですか。ホモサピエンスですのことでしょか。明らかに基本的人権の持ち主としての個人を否定している。個人主義と言ってきたからこの国はダメになったんだと、第一次安倍政権は言った。直接民主主義の担い手として、「3.11」以降、はっきりこの国で国民が立ち現われてきたからこそ、否定したい。

原発再稼働に反対する強い気持ちを持った20万を超える人が首相官邸前に集まり、それは今も続いています。電力会社の前で原発再稼働反対の集会がおこなえるのは、日本国憲法前文における「自由のもたらす恵沢を確保し」ているから。その実践を保障しているのが現行憲法第二十一条「集会・結社・言論の自由」で、無条件で一切の条件はつけていません。これらの自由は戦前に治安維持法によってつぶされ、どんどん戦争に突入していったわけです。それを阻むために、一切の制限をつけていません。今日の集会も第二十一条に基づいているし、私も言論の自由で講演させてもらっている。自民党草案では第二十一条はどうなっているか。1項目は変わらないが、新たに第2項が付いています。「前項の規定にかかわらず、公益及び公の秩序を害することを目的とした活動を行い、並びにそれを目的として結社することは認められない」。警察署が「公の秩序を害している」と判断した場合、この集会も私も実行委員会も一網打尽です。

この自民党草案は、改憲政党としての真髄、自

由民主党の本音が出ている証拠物件ですので、ぜひ有効活用してください。

私たちは、自民党政権を押し返した経験を持っています

私たちの運動は、自民党・民主党という二大政党の片方である民主党の政策を変え、世論を変えることで、2009年の総選挙で政権交代を実現させました。国民の期待を託された民主党の裏切りで、最悪の安倍長期政権の誕生を許しましたが、我々は自民党政権を押し倒した経験を持っているのです。

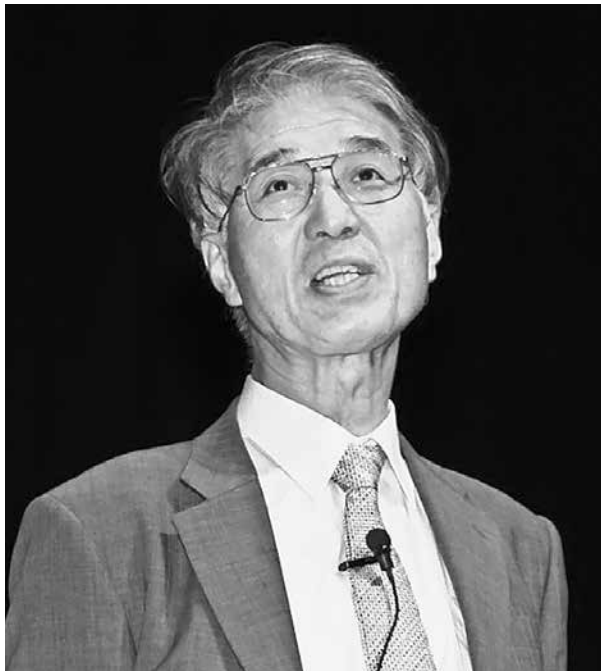
今、何をすればいいのか。九条の会がないところは、ぜひ作りましょう。九条の会は作る時にこそ、一番力が出ます。すでに作られている会は、日常的な活動に取り組みましょう。全国では、毎月「9の日」行動で駅頭宣伝しているところがあります。毎月2回、地域の全世帯にニュースを配っている九条の会があります。小さくてもいいから、草の根からの力を発揮して、運動を巻き起こしていきましょう。



講演終了後、サインセールでの小森さん（札幌会場）

小出裕章さん講演会「私たちの未来と原発」に1500人

何が本当に大切なのかを考える



9月14日、講演会「私たちの未来と原発」が札幌市民ホールで行われ、会場をあふれる1500人以上が参加しました（主催 医療九条の会・北海道）。参加者はメモを取りながら、熱心に小出裕章さん（京大原子炉実験所）のお話しに聞き入りました。会場には上田文雄札幌市長も駆けつけ、脱原発の決意をのべました。小出さんの人間性あふれる講演の一部を紹介します。（要約は編集部）

私はこれまで、原発事故を防ぎたいと思って生きてきました。しかし、私の力などまったく届かずに事故はおきました。2年半経っても収束せず、何十万もの人々が苦難のどん底にあります。福島原発の作業員たちは危険な修復作業にあたっています。それにもかかわらず安倍首相は「事故はコントロールしている」と言ってしまう。福島のこととは忘れろと言わんばかりです。それでも、この会場にいっぱいの方が集まってくださいました。これを力に、少しでもマシな未来を作っていかなければと思います。

原発はダメだ

産業革命以降、人間は猛烈にエネルギーを使うようになりました。それと機を同じくして、様々な生物の絶滅数が激増しました。新参者である人間が、愚かにも他の生き物たちを殺していきました。それだけではなく、人間も殺しました。ある

ときに原子爆弾を使うようになりました。広島原爆で炸裂したウランの重量は800gです。一方、100万kWの原発1基が1年間に燃やすウランは、1トンにもなります。それだけ死の灰ができるわけです。大量の放射性廃棄物を出さなければ原発は維持できない。私はこれを知ったとき、「原発はダメだ」と思いました。機械はいつか故障し、人間は必ず間違えます。原発を推進してきた人は、その危険性を知っているから、原発を僻地に建設してきたのです。

大変なことが起こっている

事故を起こした福島第1原発の1から3号機では、溶け落ちた炉心が、今どこにあるのすら分かりません。現場を確認することすらできません。もっと溶け落ちないように、水をかけています。その水は汚染され、どんどん溢れ出ているという事態が、事故直後からずっと続いています。原子



来賓挨拶に立つ、上田文雄札幌市長

炉を冷やす作業をしているのは東電社員ではなく、下請けの下請けのさらに下請けといった人たちで、被曝しながら苦闘しています。

震災当日、第一原発の4号機は定期検査で停止していて、燃料は原子炉の中ではなく、使用済み核燃料プールの中がありました。そのプールの隣の壁が吹き飛び大きな穴が開きました。そのプールには、ヒロシマ原爆1万4000発分のセシウム137、1331体の核燃料が底に沈んだままなのです。

プールの底から使用済み燃料を取り出さなくてはなりません。1331体の核燃料を1度のミスもなく引上げなければなりません。大変不安ですが、これはやらなければならないのです。いったい何年かかるのでしょうか。少なくとも私や皆さんが生きているうちには終わらないでしょう。それほど大変なことが今、起きているのです。

汚染水問題は2年前からわかっていたこと

汚染された水が海に流れていたことは、事故直後の2011年4月に気がついていました。東京電力はそこを塞ぎ、それ以来マスコミは汚染水のことを報道しなくなり、東電も政府も知らん顔です。最近になってようやく汚染水の問題が騒がれていますが、実は手を打つこともできないまま、この2年半ずっと続いているのです。安倍さんが言う

ように「完全にコントロール」などしていないのです。

毎日400トンもの水を注ぎ、福島第一原発全体が放射能の沼のようになっていきます。汚染水を貯めるタンクを作っていますが、被曝するのでゆっくりと作っている余裕はありません。仮説タンクなので漏れてしまうのは当たり前で、汚染水がタンクのあちこちから漏れている。これが現状です。

敷地には限りがあるので、タンクはやがていっぱいになります。そうなれば海に流すことになるでしょう。そうならないように知恵を合わせてなんとかしなければなりません。私は、水ではなく金属で冷やすことを提案しています。しかし、どうやったらこの事故を収束させることができるのかははっきりと分からないまま続いているのが現実です。

事故が起きれば汚染は世界中に

これからどんな事になるのか、予想もつきません。現在までに噴き出した放射能の量を日本政府が報告しています。大気中に放出されたセシウム137の量は、広島原爆168発分に相当します。それだけの放射能が大気中にバラまかれたことになります。(私は、日本政府は少なく報告しているとみていて、実際には、この2、3倍、つまり広島原爆300～400発分だと思います)。

これだけの量の放射能が空に撒かれ、風によって世界に広がりました。ほとんどの放射能は西風に乗って太平洋に向かい、米国に達しています。分布図をみると、北海道よりも米国西海岸の方が汚染していることがわかります。一度事故が起これば、世界中が汚染されてしまうのです。

放射能は北風によって、福島だけでなく、栃木、群馬、千葉にも、放射線管理区域にしなければならぬほど汚染しました。本来なら、東北と関東の広大な地域の人々を避難させなければなりません。

法律には「一般人は年間1ミリシーベルト以上の被曝をしてはいけない、させてはならない」とあり、「放射線管理区域から1㎡あたり4万ベク

レベルを超えて汚染されたものを管理区域外に持ち出してはならない」という書かれてあったのです。ところが福島原発事故を起こした最大の犯罪者である政府は、事故が起きたら自ら決めた法律を反故にしました。

核のお守りを100年間も

仮に、原発事故が起きていなかったとしても放射性廃棄物の問題があります。いつか誰かが何とかしてくれると期待されてきましたが、人類は未だに無毒化することができません。低レベル放射性廃棄物は300年間守らなければなりません。今から300年前といえば、忠臣蔵の討ち入りがありました。たった62年の歴史しかない電力会社が300年後まで核のお守りをすると云えるわけがない。そして、私たちが生み出した高レベル放射性廃棄物はこれから100年間責任をもたなければなりません。まともなことではありません。こんなことは決してやってはならないことだった。福島の事故がなかったとしても、悲惨なんです。こういうことを私たちの世代でやってしまったのです。原発は事故とが起きたから大変なのではなく、原発そのものがあってはならない存在だということです。

エネルギー浪費を抑える以外に道はない

私たちがエネルギーをどうやって使うのか、どういう社会をつくっていくのかということが大切になっています。

エネルギーは人間にとってなくてはならないものです。しかし、「工業文明国＝エネルギー浪費国家」が使っているエネルギーは、命を支えるためではなく、享樂的生活を支えるために使われています。一方、「エネルギー窮乏国家」では、エネルギーを使えないために人々が次々と死んでいます。地球は有限ですから、地球の人類がすべて「工業文明国」なみのエネルギーを使おうとすれば、地球の生態系は破滅します。

地球を守るのであれば、エネルギーの浪費を抑える以外に道がないのです。私たちは、「何が本当に大切なのか」ということを考えて生きなければなりません。

講演会全編をインターネット(ユーストリーム)で観ることができます (<http://www.ustream.tv/recorded/38731873>)。

また、講演資料は、当会 HP からダウンロードすることができます。



札幌市民ホールが満杯になり、立ち見も出ました

アメリカの映画監督であるウィリアム・オリヴァー・ストーンが、次時代を担う世代への教育的見地から、ドキュメンタリーを通じて「アメリカ現代史」を問い直す作業に取り組み、その成果が映像作品『The Untold History of The United States』に結集された。NHKが放映権を取得して、NHK—BS1のBS世界のドキュメンタリーで『オリバー・ストーンが語る もうひとつのアメリカ史』というタイトルで、50分番組10回に分けて放送されました。

この度、黒川一郎氏（共同代表）が、このドキュメンタリー番組の印象に残った個所を活字に起こされ、越田靖夫氏（共同代表）が整理をされましたので、ご紹介します。なお、本番組は、同名の著書として発売されています。

オリバー・ストーンが語る 「もうひとつのアメリカ史」

黒川 一郎
越田 靖夫

オリバー・ストーンの「もう一つのアメリカ」を見る。私は、オリバー・ストーン監督の作ったさまざまな映画を観て来た。その中でベトナム戦争（プラトン）・7月4日に生まれて・歴代アメリカ大統領の辛口とも云うべき作品につながる「NHK—BS1」の頭書の番組を偶然知り、再放送・再々放送の機会に録画した。米国が世界最初に「人類史上最悪の原爆投下」が倫理的に正しいものだったかどうかを再検討する。

これが出来たいきさつは、オリバー・ストーン監督と共同研究者アメリカン大学のピーター・カズニック教授がこの問題について研究していた時「ピーターこれはドキュメントを作らなければ駄目だ、から始まった。大変ラジカルで理性的で、映画監督らしい切れ味の、考えさせられるシリーズであった。放送は1回50分で都合10回。それぞれ表題で内容が表現され、前後に彼の痛烈な呼びかけを知ることができる。

内容がコンパクトで多岐にわたっており、ナレーションが早く、とてもその詳細をフォローできたとは云えないが、印象に残った個所をまとめてみた。

●序巻

平成25年8月25日にNHKスタジオで収録され放送されたオリバー・ストーンとピーター・カズニックと東大大学院政治学教授（映画評論家）藤原帰一氏そして俳優の別所哲也の座談会からこのBDは始まる。

最初の画面はオッペンハイマーが世界最初の原爆実験に立ち会っているところ。やがて、天地も裂けんばかりの大爆発！そしてオリバー・ストーンが解説にたち「原子爆弾の投下が第二次大戦の終結を早め、米国の日本本土における戦闘で多大の兵士が死傷から免れたことに大いに貢献したと

云うのは神話としか云いようがない。私は、米国のむやみに批判するつもりはなく、この国を愛すればこそ、第二次大戦後の我が国の帝国化を憂い、正しい歴史を米国民に伝えたくこの映画を作った。」と述べ、更に「アメリカが介入した第二次大戦後何回かの危機があった。折々に対処した大統領および側近にあって大統領を助けてアメリカの危機を救いながら、反対側の力によって冷遇された人生を歩んだ人を忘れてはならない。」と続く。

ヘンリーウォーレスは三期目の大統領F・ルーズベルトの知遇を得てNEW DEAL政策を成功させ、第二次大戦前の危機に冷静に対処できた。重病にもかかわらず四期目に立候補したルーズベルトは副大統領候補にまたしてもウォーレスを指名する。ウォーレスは人気も高く、それを疎ましく思った側の画策でトルーマンが副大統領候補に指名された。トルーマンの判断で、当時米国が真先に入手した原子爆弾を投下せしめたが、ウォーレスが副大統領に任ぜられていたら、非人道的な原子爆弾は使用されなかったかも知れない。

また、ウォーレスがルーズベルトの後を引き継いで大統領になっていたならば、原子爆弾は使用しなかったであろうし、男女・黒人白人間の人間的差別はなかったかも知れない。自然科学的恩恵の波は米国民等しく享受できたかも知れない。

更に、キューバの近傍における米ソ核戦争も危機一髪で避けることができた。これも振り返れば、ケネディの天才的判断で、彼の人間的苦しみを耐え忍んでフルシチョフとの間で「覚書」を交換し、かろうじて危機を回避したが、彼の突然の暗殺で直後大統領になったジョンソンは世界の警官的な態度をとり、ベトナム戦争の泥沼に入り、これはニクソン、ブッシュ父の代まで続く。(以後は各巻の紹介に止めます=編集部)

一巻：第二次世界大戦の戦禍

後世の若き世代に新たな視点を用意し、歴史に関心を持つ目を育ててほしいとこのシリーズを作成する。1931年の満州事変からナチの台頭。そして1941年12月8日の真珠湾攻撃。1945年夏の無条

件降伏(但し、天皇制その他のデリケートな記述はない)。

二巻：ルーズベルト・チャーチル・スターリン・ウォーレス

第二次世界大戦後半、スターリングラードでナチは敗北。以来ソ連の拡大(スターリンが単独での対ドイツ和平条約の締結)を恐れた米英は、1943年テヘランでスターリン・チャーチル・ルーズベルトの三者会談を行う。その後ルーズベルトとスターリンは数日間交渉を行い「ナチスとの戦争終結後にソビエトが対日戦争を開始する」よう極秘裡の約束が成立する。

1944年四期目の大統領を目指したルーズベルトはまたしてもウォーレスを副大統領に推したが党内の不正な画策に会い最終的にウォーレスは落選。ウォーレスは存在感の薄い立場となる。

1945年2月、ルーズベルトとスターリンはヤルタで会談し、ドイツ降伏後ソ連が日本に向けて宣戦布告をするよう求めた。そして、その場合には日露戦争でロシアが失った失地を回復させることを約束する。

ルーズベルトは終生ソ連と友好的態度を堅持したが、彼の死後大統領に就任したトルーマンは就任直後から反ソ的な上層部で囲まれ、一途に反ソ傾向に舵が切られた。

三巻：原爆投下

第三巻は広島・長崎の原爆投下に至るアメリカ政府内の知られざる戦争に焦点をあてる。日本の真珠湾攻撃を受けてからは米国人に、日本人は人間らしさがなく、人間以下の生物であり、アーニーバイル(記者)に至っては「敵はゴキブリである」とさえ酷評した。

1945年3月10日 ルメイは東京を黄リン製焼夷弾で絨毯爆撃を300機で行い、死者十万人。住宅焼失百万戸(映画の情報による)。搭乗員は空中に居ながら人間の焼ける臭いが搭乗機まで届き、嘔吐するまでにひどかったと云う。

原爆の投下を人類に対する倫理的違反行為であると軍部内で反対したのはミニッツ、アイゼンハワー、マッカーサー、キング、アーニルト、レイヒと云う6人の将軍たちであり、彼らはそれが道徳的にも軍事的にも必要なしとした。核爆弾を開発した科学者たちも「これを実戦に使用するのは恐ろしいことだ」と反対した。そして原爆の破壊力のすさまじさから核兵器廃棄と云う選択肢が政権内で多数を占めたことから、トルーマン大統領等が否定しているところを描いている。そしてトルーマンと原爆投下の是非で対立した老齢のウォーレン国務長官に「気に入らないようなら出て行ってくれ」と放言した。同長官の突然の辞任で原爆投下の問題は終わりを告げることになる。8月6日に広島に、9日に長崎に原爆(広島はウラン、長崎はプルトニウム)が投下され、同じく9日にソ連が日本に宣戦布告をし旧満州に侵攻を開始する。

日本は5月以来ソ連を通じて終戦の相談を進行させていたが、ソ連の参戦を隠匿し、日本が気づかないように配慮した陰険なやり方が行われたことになる。

四巻：冷戦の構図

第二次世界大戦直後は、米ソに融和関係があると思われ米国民は喜んだ。国内では雇用など不足があったが国家は繁栄し、全世界の金の三分の二を保有、同じく投資額も三分の二を占めた。そしてトルーマンは中東の石油確保の問題から更に反ソ的傾向を強める。冷戦時代の象徴として「鉄のカーテン」という呼称が起った。ウォーレスは当時商務長官だったが、米ソの対立は不幸な結末になることを憂いた。バーンズ国務長官は彼の言動に不審を抱きトルーマンに「自分かウォーレスのいずれかを更迭せよ」と迫りウォーレスは更迭された。アメリカは核兵器を温存し、世界に君臨する反共主義国家となる経過が明らかになって行く。

1947年トルーマンは国家安全保障法を作り、フォレストを責任者に任命。この時CIA(CENTRAL INTELLIGENCE AGENCY)ができ、

情報収集・情報普及・国家の安全保障に関する任務の遂行などが任務とされた。

五巻：アイゼンハワーと核兵器

冷戦構造が破綻し、核開発戦争が繰り広げられる時代である。アメリカは軍事産業が隆盛を辿り、産軍複合体は原子力の平和利用を煙幕として歴史上もっとも急速で無謀な核工業がエスカレーションして行った。アイゼンハワーの在任中核爆弾は3万発に達する。これは広島型136万発に相当する。そして、緊急時に大統領の役割が無能力に陥ったときは、核攻撃の命令を部下に移譲することは今迄知られていない。かくして彼は、核兵器を配備し、力の外交によるアメリカエンパイアを確立したのである。

他方日本では同時期に反核運動が大きなものになってきた。これに対し米国大使館・CIAなどが、その運動を鎮めるためにA級戦犯だった正力松太郎の力を利用しようと2年間の収監を解き釈放してマスコミの社主の地位を与え「原子力の父」を作り上げた。

「かつて第二次世界大戦の恐怖を体験した者のみに平和憲法と反核主義の道が開かれている。」ストーン共同研究者ピーター・カズニックは「日本国民が、今回の悲劇(福島第一原発事故)を契機としてクリーンエネルギーと米国の核の傘の下での抑制力の依存を拒絶する道を前進することを願う。」と云っている。

六巻：ジョン・F・ケネディと全面核戦争の瀬戸際

民主党のホープだったケネディがキューバ危機で全面核戦争を回避した。そして核軍縮と米ソ平和的共存を訴えた。キューバにソ連から核兵器が持ち込まれ、フルシチョフもまた大胆にも核兵器をキューバに設置して危機一髪の核戦争の危機であった。平和共存をとらえたケネディに対し米国軍部や右翼保守派は、政府は弱腰であると非難する。射殺された年にワシントン大学で彼が行った

演説は「人類の未来を憂いた稀にみる演説」だとストーンは強調する。

ケネディとフルシチョフの度重なる親書の交換で史上最大の世界核戦争は回避され、キューバからソ連の核兵器が撤去された。映画は米ソのすさまじいまでのやり取りの詳細を描いている。

軍の怒りをかったケネディは米国内で暗殺される。(その詳細は未だに不明)そしてケネディの死後数時間で大統領となったジョンソンは、ケネディとは別の路線即ち核の大量保有国に米国の舵を取るように変化する。

七巻：ベトナム戦争～運命の暗転

米国の東南アジア小国に対する各個撃破政策。ベトナム戦争はジョンソン、ニクソン、クリントン、ブッシュ父大統領の時代へと続いた。トンキン湾で米国駆逐艦が攻撃されたと云う虚言で始まったこの戦争の大義を、現大統領のオバマを含めた歴代大統領が未だ説かず今なお続くアメリカ社会の分断を厳しくこの映画は指摘している。

八巻：レーガンとゴルバチョフ

この巻の最初に日本の政治学者・映画評論家の藤原帰一氏は「八巻目は冷戦末期でゴルバチョフの活躍で、核兵器の廃絶を実現するまたとない機会であったが一步のところまで失敗に終わり、九巻・十巻は超大国アメリカの現状と未来が描かれている」と解説している。八巻のタイトルにカーターの名前がないが、この巻はカーターから始まる。

純朴な性質のカーターは、初めは温和な平和主義者でベトナム戦争は不要なものだったと云ったが、内外に瑣事(編集部註:日常のささいな出来事)が余りにも多く発生し、彼自身も新自由主義的方针に傾き、政権後期にはベトナム戦争に参加した兵士達を称えるようになった。

カーターのそれでも温和な政策に不満な勢力がフォード次いでレーガンを大統領に選んだ。レーガンの大統領時代はゴルバチョフ時代と重なる。ストーンはゴルバチョフを稀にみる民主主義者・

ヒューマニストと称えている。この時代は米ソ平和共存の PROPOSAL が盛んな時代であった。

1950年代の反共・反ソの機運はレーガンをリベラル派から保守主義者に転じさせる。彼は映画俳優組合の委員長であったが、下院の非米活動委員会(マッカーシーやニクソン等が関与)で所謂「赤狩り」に一役かった。国内的には「恵まれない層」に無慈悲に映る政策を連発。右翼系統放送局の乱立。政治批判レベルが著しく低下したと云われる。対中南米政策も、前任のカーターが比較的穏健だったのと対照的にラテン・アメリカの社会主義政権や反体制ゲリラに対してタカ派的態度をとりはじめる。(ニカラグア、エルサルバドル等)

実際にはゴルバチョフの方から平和共存の提起が何度もあったが、レーガンは一度も“yes”を発したことはなかったと云う。当時、唯一絶好の核軍縮の世界的規模の実現が展望される機会だったが結局不可能となって今日に至っている。後出するように、アメリカは超大国の姿勢を崩してはおらず、イスラム原理主義を大統領自身の口吻からも判るように、われわれの首相が「美しい日本」を乱発するのと一脈通ずるものがあるかも知れない。

九巻：唯一の超大国アメリカ

1980年代の世界はルーズベルトとチャーチルの仲が良かった時代と同じように「平安だ」と新聞は書き立て、アラファトもまた同じような感想を漏らした。1988年ブッシュ父が大統領に当選。1990年以来、米国は世界の超大国と自認し、真珠湾攻撃に触発された反撃・ノルマンディ作戦など50年前の栄光を誇った。

反対に、第二次大戦で銀行・IBM・GM・FORDなど金融・製造業・法律関係その他少なくない石油・通信関係企業がナチに協力的であることを故意に無視、ソ連に対してはブッシュは友好関係を持つとせず、反面、東ヨーロッパは独力で独立を果たし、90年にベルリンの壁が崩壊したのに終局的に資本主義社会が究極のあるべき社会体制であると断じ、ソ連との友好関係は結ばれなかった。これとは別にパナマや中東に侵攻し翌年クエ

ートを占領した。これは中東の深みにアメリカがはまって行ったことを意味する。ブッシュも勝利の高揚感がなく、91%の支持率を持ちながら共和党のクリントンに大統領が交代する。

クリントンは米国・南アフリカのみ未適用の医療保険制度を数千万人の米国非保険者のために制度化しようとしたが、共和党から猛反対があり、平和な世情なのにもかかわらず国の予算が平和福祉関係に回することはまたしても見送られた。

この前後にソ連崩壊が起こる。1991年ゴルバチョフは辞任し、将来のソ連はどうなるのか国民は不安に突き落とされた。エリツィンは米国の知恵を借りて資本主義社会の真似ごとをしたが、G7・IMFなどのショック療法は無効に終わった。エリツィンは国営企業を民営企業化し、一夜で億万長者になった共産党員もいる始末だった。米国の経済専門家のショック療法も空しく、新ロシアを良くしようとする7%、旧来のソ連を良くしようとするもの77%だった。後にゴルバチョフの回想録で彼は、「エリツィンがブッシュのお気に入りになった。そして、エリツィンはアメリカが望むような形態のソ連を建設した」と回顧した。

クリントンは必要もないのに新たに軍事予算を組み、ミサイル防衛を重くみる超大国になった。対人地雷禁止条約も批准しなかったし、世界の武器輸出の6割を占め、冷戦後10年間侵略した。(アラビア・コロンビア・アジア)そして最後の2年目に不倫の疑いで退場する。

次の大統領候補にゴアとブッシュ息子が立候補する。ゴアが地球環境を重視するのに対し、ブッシュは生活環境を重視するとした。結果、ゴア：約4880万票、ブッシュ：約4850万票でゴアが勝利したが、フロリダ州の票の10%が無効票となり、ブッシュが当選した。この時から国民は迷い始めた。不吉な予感があった。ブッシュはネオコン(neoconservative)で周囲を固め(クリステル・ケーガン、ラムズフェルト・チュニー)、あたかも旧ローマ帝国のように、国連を無視し、フセイン打倒を口にし、京都議定書の署名を拒否するなどの行為をした。

2001年CIA・FBI筋からアルカイダの対米

攻撃準備が進んでいる。すでに飛行機訓練を受けているビンラディン派がいることをライス、ラムズフェルト等に報告されたが無視された。この時指導者がワシントン、リンカーン、ルーズベルト、マーチン・ルーサー・キングあるいはアル・ゴアが大統領だったら。

不幸にしてジョンソン、トルーマン、レーガンの系統だったので、対イランの国際的十字軍がその系統のもので形成された。ブッシュに ①我々の側につくのか ②テロリストの側につくのかと迫られては、アメリカと云わざるを得ない。ブッシュは第二のローマ帝国気取り・フランス革命の施行者気取りであった。

十巻：テロの時代；ブッシュからオバマへ

ブッシュにとって「9.11」事件は大きなチャンスだった。彼らネオコンは「9.11」事件は真珠湾攻撃にも比すべき切っ掛けで、軍事態勢を強化する理由として早速利用した。ブッシュ自身も強力な権力を持つ大統領になり、アルカイダ関係の人間を1,200人拘束、サダムフセインを攻撃、イラク爆撃をすぐさま開始、国内の情報機能を拘束制限・盗聴可能とした。更に、米国愛国者法を発布した。議会で只一人反対したファインゴールド議員は「このやり方はアメリカ国民の自由を拘束するものである」また、国家安全法に対しては、プレジンスキー(政治学者)は「被害妄想である」と難じた。ブッシュは一ヶ月後アフガンに宣戦布告、攻撃を加えた。

グアンタナモの捕虜収容所では、ビンラディン関係容疑者数千人を拘束し拷問を加えたが、実際はアフガンの民兵か賞金稼ぎ目当ての民兵で、18歳から80歳までの捕虜6人が有罪9人が自殺、釈放者は600人に上り、有罪者は8%に過ぎなかった。

ブッシュは「敵はサダムフセインだ」とねつ造を繰り返し各国に賛意を迫ったが、フランス・ドイツ・ロシアはこの戦争に否定的意見であった。

更にブッシュは、イスラム原理主義者であり戦争をしているが「私は心安らかです」と嘯いた。

世界各地でイスラム戦争反対のデモが起こり、84%の国民が反対を唱えた。そしてパウエルは国連で75分間も「フセインが秘密兵器を持っている」と長々と嘘の証言をした。

2004年ブッシュは再選された（大統領職）。2008年その支持率は最低を記録する。2009年民主党のオバマがマケイン、ヒラリー・クリントンを破り当選した。

彼はかってイラク戦争に反対していた。オバマの勝因は、ウォールストリートの財界、製薬会社などからの個人献金を支持材料にして当選を果たしたのだった。オバマは資本家陣営を応援し、「割を食った」のはオバマに投票した民衆の側だった。中間選挙で民主党は共和党に大敗を喫する。

ブッシュは悪いがオバマはまだ良いという私の思いは打ち砕かれた。米国大統領はオバマを含め「一貫して力による世界制覇、帝国主義を維持しよう」という意図が見え隠れしている。

無人戦闘機の採用、軍備拡張の持続、宇宙空間を支配する意図、これらは世界第二位の経済構造を誇る中国にも見られる。無人飛行機の採用等々、社会主義指向だから安心して良いとはとても言えるものではない。

ストーンはこの論文の終末で、過去のヘンリー・ウォーレスを追懐して、幾つかの危機が、彼が大統領であったなら回避できたのではないかと述べ、第二次大戦中から現在を通じて、ルーズベル

ト、チャーチルの存在、63年のケネデー、フルシチョフの努力が核戦争の危機を救ったこと、レーガン、ゴルバチョフの時代の後者から主に発せられた核廃絶の歩みよりなど幾つかの人類の幸福に寄与した時代・チャンスを回顧している。

ストーンの見聞録はどちらかと云うとベシムチックである。しかし、これ程詳細に自己のベトナム戦争の体験をはじめ、アメリカの現代史を独特の面から私どもに教えてくれたものは無く感謝に堪えない。ネットでみると長短まちまちであるが、ラジカルな記述で多くの方がアメリカの歴史を見直した感想に感動する。

私たちは巻頭にある短歌の意味をもう一度読み直し、今年8月、ストーン氏が原水爆禁止世界大会に来日することに新しい意義を見出すであろうと思う一人々々でありたい。

終わりに、オリバー・ストーン監督とピーター・カズニック准教授が原水爆禁止2013年世界大会特別企画「核兵器のない世界へのメッセージ in ヒロシマ」に登壇し、広島に被爆者とトーク。ストーン氏は「被爆者は大事な戦争の証言者だ、生き延びたあと、若い人たちに体験を引き継ぎ、記憶させる責任がある。愛にあふれた方々だ」と称え、更に、「一緒に立ちあがって闘って下さい」と話す、共感の拍手が起こった……と新聞は伝えている。

(くろかわ いちろう 共同代表 札幌医大名誉教授)

(こしだ やすお 共同代表 元北海道臨床検査技師会副会長)



安倍内閣の憲法改悪(特に憲法第9条・同2項、98条)、 「集団的自衛権」行使・「特定秘密保護法」制定に断固反 対し、医療九条の会・北海道の出発時の信念をきっぱり 守り抜こう

2013年10月3日

医療九条の会・北海道 共同代表 黒川一郎

最近の日本の政治情勢

ここ数ヶ月の日本の政治情勢は激動の一途をたどっているといっても過言ではない。

そもそも九条の会が全国一斉にこかしこと芽生えたのは、加藤周一氏等日本の著名な知識人が第一次安倍内閣の現行憲法の改悪特に憲法9条同2項の廃絶を掲げた悪政の烽火に危機感を覚え、全国的に9条擁護の会の設立を呼びかけられたことに発する。“憲法9条は瀕死の状態”、“憲法9条の旗はぼろぼろ、しかし握って放すまい”、このような声が全国的に沸き起こったのも故なしとしない。今や全国の九条の会は9千以上を数えた。そして私どもの運動は、世論を変えることで2009年の総選挙で麻生内閣を倒し、政権交代を実現させた。国民から託された民主党が世論を裏切り、最悪の第二次安倍内閣の誕生を許してしまったが、我々の草の根の活動が自民党政権を押し倒したという貴重な経験をもっている。此の勝利の実感を今また我がものとして振り返り、草の根の力の偉大さを自覚し、九条の会をさらに全国的に広げることに努力し、おのおのの会がそれ自身かけがえのないものであることを自覚し努力せねばならない。

と、ここで申しあげるのも、安倍内閣が今回の参議院選挙中、押し黙っていた憲法改悪・違憲である集団自衛権行使の動きを可能にするため“クーデター”的に憲法解釈変更の動きを加速しようとしていることに注目しなければならないからである。

集団的自衛権行使について

先に、彼らは改憲発議の要件を衆参各院の「3分の2」から「2分の1」に緩和する96条修正をもくろんでいたが、改憲派の慶応大小林教授、自民党元古賀幹事長等が「憲法が憲法でなくなる」「邪道」などの激しい批判を先鋒として、大衆の批判を浴びトーンダウンした。

選挙後、彼らは8月8日内閣法制局長官に元フランス大使で集団的自衛権行使容認の積極派である小松一郎氏を任命した。小松氏自身も「異様な人事」と後出するテレビ会見で言われたように、誰しも思うであろう。はたせるかな西川伸一法政大学教授をはじめ「前例のない人事である」、自民党内部からさえ「スポーツ競技の審判に自らの味方を審判に採用するようなもの」(山崎拓元副総裁)などの批判があがるほどであった。

9月14日TBSのインタビューで小松氏は以下のように答えている。(質問者は、最初にもし集団自衛権行使が発動されるとすれば、日本国憲法9条および2項は投げ捨てられ自衛隊員が海外出動して身命をそこない、あるいは相手側の人たちを殺傷しかねず、日本のこれまでの、海外派遣で自衛隊員・相手側の人命を損傷しなかった歴史が破壊されるおそれがあるが・・・と前もって発言していた)。それに対し小松氏は、①集団的自衛権は、自国の国民の福祉・宗教・生活を保護し、相手国の国民の両者を保護するものである。②たしかにわたしは、経歴として適当ではない。しかし、日本国民も海外の国民も集団的自衛権の保持を歓迎する気持ちをもっていると信じている。③私の行動は安倍総理の見解をもとに行動したものである。④私の意見は、内閣全体の意見を代表するものである。⑤従来の内閣法制局の見解はトップダウンでなくボトムから積み上げてトップにいたるのであるが、これが今回は違うところである。この集団自衛権行使はトップダウン方式ですすめなければならない。小松氏の発言は、安倍首相が集団的自衛隊行使に「積極的平和主義」なる言葉を言い始めたことにも及んだ。「積極的平和主義」とは解釈改憲によって集団的自衛権の行使や海外での武力行使を可能にしようとする動きをオブラートに包み、日本国民や周辺国の批判を和らげるためにつくった概念であるといわれる。小松氏のインタビューの合間に、第一次小泉内閣時の法制局長官阪田雅祐氏の「集団的自衛権が成立すると、現行憲法9条2項は自然に消滅する。自衛隊員で戦場で戦死・戦傷者が発生し、敵方でも戦死・戦傷者が発生することは必然で、そこには憲法9条2項の存在が失せてしまうことは必然である」との挿入発言があった。また「小松さんは国際法の専門家であっても、憲法など国内法の専門家ではなく、ある意味で素人である。なぜそんな人事をしたか、唯一の理由は小松さんが、集団的自衛権推進にかかわったからであろう。逆に言えばそんな人でも持ってこなければ、集団的自衛権の憲法解釈を変える専門家はいないということ、非常にゆがんだ人事である」(孫崎亨:元外務相国際情報局長の言葉)も付言しておこう。

安保法制懇(安保保障と防衛力にかんする懇談会)は早ければ11月下旬にも、集団的自衛権の行使を全面的に解禁する報告書を提出する構えである。加えて米国をモデルとする「国家安全保障戦略」や軍事力の整備計画である「防衛計画大綱」を新たに策定する計画である。国会はもちろん与党内部でも議論がされないまま、人事やお手盛り諮問機関の答申で中央突破をはかる「クーデター的、暴走と言われても仕方がない。

来年の通常国会でも、集団的自衛権行使をみとめる「国家安全保障基本法案」やその行使手続きを定めた「集団自衛事態法案」の提出を狙う動きもある。

集団的自衛権とは

自国が攻撃されないのに、他国が起こす戦争に参加すること。日本防衛とは無関係である。根拠とされているのは、国連憲章第51条は、「国際連盟加盟国に対し武力攻撃が発生するときには・・・個別的自衛または集団的自衛の固有の権利を害するものではない」と定めている。ここでいう「手段的自衛権」とは、各国が攻撃されたときに行使するもの。集団自衛権の行使は「自衛」とは無縁なもので、海外での戦争や軍事介入の口実に使われてきたものであり、憲法9条の「歯止め」を除去しようとする動きである。

しかし、世論は集団的自衛権行使に「賛成」40%、「反対」50%(JNN)。「27%、59%」(朝日)、「32%、54%」(日経)と反対が多数であり、歴代法制局長官もこぞって反対を表明。小松人事にも批判の声が高い。日々の動きは予断を許さないが、これらの動きは自衛権行使の企てを未然に防止する大きなバリアーになることは必定である。安倍総理は米国において「私が集団的自衛権行使に傾く軍国主義者といわれてもかまわない」と放言し、識者を失笑させたが、「あまりといえば、情けない」(9月26日；

ご案内

北の国から 「平和・憲法・市民」 —いま、声をあげ、動くとき—

憲法を活かし、平和な社会をめざして市民が声をあげようと、道内各地・層の九条の会が実行委員会を結成して、開催します。

11月1日（金）午後6時から

札幌市教育文化会館・大ホール（札幌市中央区北1西13）

講演 「行動する市民が世界を変える」 目加田説子さん（中央大学教授）

演奏 「沖縄から平和をうたう」 大工 哲弘さん（八重山民謡第一人者）

参加費 500円

主催 同実行委員会（当会も実行委員会に参加しています）

講演会 「取材記者が語る『原子力 負の遺産』」

昨年から道新で連載を重ね、8月に発刊されて話題を呼んでいる「原子力 負の遺産」（北海道新聞社）。中心的に取材・執筆にあたった記者から直接お話を聞く会です。

12月8日（日）午後2時から

紀伊國屋書店札幌本店1Fロビー（札幌市中央区北5西5）

講演 関口裕士 記者（北海道新聞報道センター）

主催 医療九条の会・北海道

後援 北海道新聞社

医療九条の会・北海道
会報 第22号

●発行日／2013年10月28日 ●発行責任者／松崎 道幸
●連絡先／札幌市北区北14西3 1-12 ●TEL (011)758-4585 / FAX (011)716-3927
●<http://iryo-9jyo.net> 9jyo@dominiren.gr.jp